

里 山 の 秋

中村高士(富里市)

日時：2019年10月19日(土)10～12時 天候：曇り

場所：京成線公津の杜駅周辺の里山

参加者：9名(女性3名男性6名) 成田市環境計画課4名

担当指導員：小川洋子、戸村真理子、伊藤道男、中村高士

関東に大打撃を与えた大型台風が2つ続き、開催が危ぶまれたが、市の配慮もあり、開始時間を30分遅らせて実施することで決定。前日まで無理かなと思っていた指導員一同、気合を入れ直して集合。まだ雨が残る中、欠席者は2名だけで、市民9名が参加された。準備した資料を渡し、主催者挨拶のあと全員で大通りを抜け里山に入る。

雨は上がり、道脇に植えられた、お茶の白い花と大きな実(ツバキ科特有)が迎えてくれた。花が終わり実の付いたツルボ群落や葛、サルトリイバラなどを観ながら進む。人家が途切れ薄暗い杉の林に入ると、無残な杉の倒木があちこちに。ここで伊藤さんが力説：当県オリジナルのサンプスギは、材が美しく成長が速いので、クローン技術(挿し木)で大量に植林されたが、約20年経つと、キノコによる非赤枯性溝腐病にかかりやすく、かかると芯部が弱体化して、台風などの強風に耐えられないことなど。一同、林業の難しさを知る。丘の上のソバ畑では、戸村さん紹介の昔話「おそばのくきはなぜあかい」(石井桃子作)で感心し、脇道のアケビの実も試食。シロヨメナの純白の可憐な花を観て下り坂に入る。台風被害路を迂回し、事前に通行を了解頂いた民家の畑では、地元の方も驚くほど立派な大根やキャベツなどの野菜も観察。その庭では、家人から、アンデスの乙女という黄色の花をつけた木の名前を教えて頂く。里山を抜け谷津田に出る。小川さんから、畔に咲くコセンダン草の種の特徴の説明があり、皆にルーペで観察してもらう。細かい釣り針の返しのような刺が種全面に生えていて、動物や人の衣服に着いて種子を散布する植物の仕組みを体感する。斜面ではトキリマメ、ツリバナ、ムラサキシキブなどの小灌木の実や、カシ類の実など見どころ満載。ジョロウグモの網では、小さく光る水滴のようなシロカネイソウロウグモが紹介され、動くのを観て歓声が上がる。カヤとイヌカヤの違いも触って実感する。民家の斜面で、ツリガネニンジン(タチアサギ)の淡いムラサキの花を観て終了。

最後に参加者からは、「杉の倒木と病気の関係が良くわかった。」「普段近くを散歩しているが、改めてこんなに豊かな自然があることに気づかせてもらえて感銘を受けた、また開催して欲しい。」などのうれしい言葉を頂き、下見を重ねた準備が報われた観察会だった。



サンプスギには非赤枯性溝腐病が・・・



種に細かいギザギザがあります